

校異源氏物語・きりつば

いつれの御時にか女御更衣あまたさふらひ給けるなかにいとやむことなき、はにはあらぬかすくれて時めき給ありけりはしめより我はと思あかり給へる御方くめさましきものにおとしめそねみ給おなしほとそれより下らうの更衣たちはましてやすからすあさゆふの宮つかへにつけても人の心をのみうこかしうらみをおふつもりにやありけむいとあつしくなりゆきもの心ほそけにさとかちなるをいよくあかすあはれなる物におもほして人のそしりをもえは、からせ給はす世のためしにもなりぬへき御もてなし也かந்தちめうへ人などもあいなくめをそはめつ、いとまはゆき人の御おほえなりもろこしにもかゝることのおこりにこそ世もみたれあしかりけれとやうくあめのしたにもあちきなう人のもてなやみくさになりて楊貴妃のためしもひきいてつへくなりゆくにいとはしたなきことおほかれとかたしけなき御心はへのたくひなきをたのみにてましらひ給ち、の大納言はなくなりては、北の方なんいにしへの人のよしあるにておやうちくしさあたりて世のおほえはなやかなる御方くにもいたうおとらすなにとこのきしきをもてなしたまひけれととりたて、はかくしきうしろみしなれば事ある時はなをより所なく心ほそけ也さきの世にも御ちきりやふかかりけむ世になくきよらなるたまのをこのみこさへうまれ給ひぬいつしかと心もとなからせ給ていそきまいらせて御覽するにめつらかなるちこの御かたちなり一のみこは右大臣の女御の御はらにてよせをもくうたかひなきまうけの君と世にもてかしつき、こゆれとこの御にほひにはならひ給へくもあらさりければおほかたのやむことなき御おもひにてこの君をはわたくし物におもほしかしつき給事かぎりなしはしめよりをしなへてのうへ宮つかへし給へき、はにはあらさりきおほえいとやむことなく上すめかしけれとわりなくまつはさせ給あまりにさるへき御あそひのおりくになにこにもゆへあることのみしにはまつまうのほらせ給ある時にはおほとのもりすくしてやかてさふらはせ給ひなどあなちにおまへさらすもてなさせ給しほとにをのつからかろき方にもみえしをこのみこうまれ給てのちはいと心ことにおもほしをきてたれば坊にもようせすはこのみこのる給へきなめりと一のみこの女御はおほしうたかへり人よりさき

にまいり給てやむことなき御おもひなへてならすみこたちなともおはしませは
この御方の御いさめをのみそ猶わつらはしう心くるしう思ひきこえさせ給ける
かしこき御かけをはたのみきこえなからおとしめきすをもとめ給人はおほくわ
か身はかよはく物はかなきありさまにて中／＼なる物思ひをそし給御つほねは
きりつほ也あまたの御方／＼をすきさせ給てひまなき御まへわたりに人の御心
をつくし給もけにことほりとみえたりまうのほりたまふにもあまりうちしきる
おり／＼はうちはしわたとの、こ、かしこのみちにあやしきわさをしつ、御を
くりむかへの人のきぬのすそたえかたくまさなきこともあり又ある時にはえさ
らぬめたうのとをさしこめこなたかなた心をあはせてはしたなめわつらはせ給
時もおほかり事にふれてかすしらすくるしきことのみまされはいといたう思ひ
わひたるをいと、あはれと御覽して後涼殿に本よりさふらひ給更衣のさうしを
ほかにうつさせ給てうへつほねにたまはすその怨ましてやらむ方なしこのみこ
みつになり給年御はかまきのこと一の宮のたてまつりしにおとらすくらつかさ
おさめ殿のものをつくしていみしうせさせ給それにつけても世のそしりのみお
ほかれとこのみこのおよすけもておはする御かたち心はへありかたくめつらし
きまてみえたまふをえそねみあへたまはす物のこ、ろしり給人はか、る人も世
にいておはするものなりけりとあさましきまてめをおとろかし給その年の夏み
やす所はかなき心地にわつらひてまかてなむとし給をいとまさらにゆるさせ給
はす年ころつねのあつしさになりたまへれば御めなれて猶しはし心みよとのみ
のたまはするに日々にをもり給てた、五六日のほとにいとよはうなればは、君
なく／＼そうしてまかてさせたてまつりたまふか、るおりにもあるましきはち
もこそと心つかひしてみこをほと、めたてまつりてしのひてそいて給かきりあ
ればさのみもえと、めさせ給はす御覽したにをくらぬおほつかなさはいふ方な
くおもほさるいとにほひやかにうつくしけなる人のいたうおもやせていとあは
れと物を思ひしみながら事において、もきこえやらすあるかなきかにきえいりつ
、ものし給を御覽するにきし方ゆくすゑおほしめされすよろつのことをなく
／＼ちぎりのたまはすれと御いらへもえきこえ給はすまみなどもいとたゆげに
ていと、なよ／＼とわれかのけしきにてふしたれはいかさまにとおほしめしま
とはるてくるまの宣旨などのたまはせても又いらせ給てさらにえゆるさせ給は
すかきりあらむみちにもをくれさきた、しとちきらせ給けるをさりともうちす
て、はえゆきやらしとのたまはするを女もいといみしとみたてまつりて
かきりとてわかる、道のかなしきにかまほしきはいのちなりけりいとか

く思たまへましかはといきもたえつゝきこえまほしけなる事はありけなれとい
とくるしけにたゆけなれはかくなからともかくもならむを御覽しはてむとおほ
しめすにけふはしむへきいのりともさるへき人くうけたまはれるこよひより
ときこえいそかせはわりなくおもほしなからまかてさせ給御むねつとふたかり
てつゆまとろまれすあしかねさせ給御つかひのゆきかふみほともなきに猶いふ
せさをかきりなくのたまはせつるを夜中うちすくるほとになむたえはて給ぬる
とてなきさはけは御つかひもいとあえなくてかへりまいりぬきこしめす御心ま
とひなにこともおほしめしわかれすこもりおはしますみこはかくてもいと御覽
せまほしけれとかゝるほどにさふらひ給れいなき事なれはまかて給なんとすな
にことかあらむともおほしたらすさふらふ人くのなきまとひうへも御なみた
のひまなくなかれおはしますをあやしとみたてまつり給へるをよろしきことに
たにかゝるわかれのかなしからぬはなきわさなるをましてあはれにいふかひな
しかきりあればれのさほうにおさめたてまつるをは、北の方おなしけふりに
のほりなんとなきこかれ給て御をくりの女房のくるまにしたひのり給ておたき
といふ所にいかめしうそのさほうしたるにおはしつきたる心地いかばかり
かはありけんむなしき御からをみるく猶おはする物とおもふかいかひなけ
れははひになりたまはんをみたてまつりていまはなき人とひたふるに思なりな
んとさかしうのたまひつれとくるまよりもおちぬへうまろひ給へはさは思つか
しと人くもてわつらひきこゆ内より御つかひあり三位のくらひをくり給よし
勅使きてその宣命よむなんかなしきことなりける女御とたにいはずなりぬる
かあかすくちおしうおほさるれはいまひときさみの位をたにとをくらせ給なり
けりこれにつけてもにくみたまふ人くおほかり物思ひしり給はさまかたちな
とのめてたかりし事心はせのなたらかにめやすくにくみかたかりしことなどい
まそおほしいつるさまあしき御もてなしゆへこそすけなうそねみ給しか人から
のあはれになさけありし御心をうへの女房などもこひしのひあへりなくてそと
はかゝるおりにやとみえたりはかなくひころすきてのちのわさなどにもこまか
にとふらはせ給ほとふるまゝにせむ方なうかなしうおほさるゝに御方くの御
とのゐなともたえてし給はすたゝなみたにひちてあかしくらせたまへはみた
てまつる人さへつゆけき秋也なきあとまで人のむねあくましかりける人の御お
ほえかなとそ弘徽殿などには猶ゆるしなうのたまひける一の宮をみたてまつら
せ給にもわか宮の御こひしさのみおもほしいてつゝしたしき女房御めのとなど
をつかはしつゝありさまをきこしめす野わきたちてにはかにはたさむきゆふく

れのほとつねよりもおほしいつることおほくてゆけひの命婦といふをつかはす
ゆふつくよのおかしきほどにいたしたてさせ給てやかてなかめおはしますかう
やうのおりは御あそひなどせさせ給しに心ことなる物のねをかきならしはかな
くきこえいつる事の葉も人よりはことなりしけはひかたちのおもかけにつとそ
ひておほさるゝにもやみのうつゝには猶おとりけり命婦かしこにまうてつきて
かとひきいるゝよりけはひあはれなりやもめすみなれと人ひとりの御かしつき
にとかくつくるひたてゝめやすきほどにてすくし給へるやみにくれてふしゝ
つみ給へるほどに草もたかくなり野わきにいとゝあれたる心地して月影はかり
そやへむくらにもさはらすさしいりたるみなみおもてにおろしてはゝ君もとみ
にえ物ものたまはすいまゝととまり侍かいとうきをかゝる御つかひのよもきふ
の露わけいり給につけてもいとつかしうなむとてけにえたふましくない給ま
いりてはいとゝ心くるしう心きもゝつくるやうになんと内侍のすけのそうし給
しを物おもふたまへしらぬ心地にもけにこそいとしのひかたう侍けれとてやゝ
ためらひておほせことつたへきこゆしはしはゆめかとのみたとられしをやう
くゝ思ひしつまるにしもさむへき方なくたえかたきはいかにすへきわさにかと
もとひあはすへき人たになきをしのひてはまいる給ひなんやわか宮のいとおほ
つかなくつゆけきなかにすくし給も心くるしうおほさるゝをとくまいり給へな
とはくゝしうものたまはせやらすむせかへらせ給つゝかつは人も心よはくみ
たてまつるらむとおほしつゝまぬにしもあらぬ御けしきの心くるしさにうけた
まはりはてぬやうにてなむまかて侍ぬるとて御ふみたてまつるめもみえ侍ら
ぬにかくかしこきおほせ事をひかりにてなんとてみ給ほとへはすこしうちまき
るゝこともやとまちすす月日にそへていとしのひかたきはわりなきわさにな
むいはけなき人をいかにと思ひやりつゝもろともにはくくまぬおほつかなさ
いまは猶むかしのかたみになすらへてものしたまへなどこまやかにかゝせ給へ
り
宮木のゝつゆふきむすふ風のをとにこはきかもとを思ひこそやれとあれと
えみたまひはてすいのちなかさのいとつらう思給へしらるゝに松のおもはんこ
とたにはつかしう思給へ侍れはもゝしきにゆきかひ侍らんことはましていと
ゝかりおほくなんかしこきおほせことをたひくゝうけ給はりなからみつからは
えなん思たまへたつましきわか宮はいかにおもほししるにかまいたまはん事
をのみなむおほしいそくめれはことほりにかなしうみたてまつり侍なとうち
くゝに思たまふるさまをそうし給へゆゝしき身に侍れはかくておはしますまい

まいましようかたしけなくなむとのたまふ宮はおほとのもりにけりみたてまつりてくはしう御ありさまもそうし侍らまほしきをまちおはしますらんに夜ふけ侍ぬへしとていそくくれまとふ心のやみもたえかたきかたはしをたにはるく許にきこえまほしう侍をわたくしにも心のとかにまかてたまへ年比うれしくおもたゝしきついでにてたちより給し物をかゝる御せうそこにてみたてまつる返ゝつれなきいのちにも侍かなむまれし時より思ふ心ありし人にて故大納言いまはとなるまでたゝこの人の宮つかへのほいかならすとけさせたてまつれ我なくなりぬとてくちおしう思くつをるなど返ゝいさめをかれ侍しかははかゝしううしろみ思人もなきましらひはなかゝなるへき事と思給へなからたゝかのゆいこんをたかへしと許にいたしたて侍しを身にあまるまでの御心さしのよろつにかたしけなきに人けなきはちをかくしつゝましらひ給ふめりつるを人のそねみふかくつもりやすからぬ事おほくなりそひ侍つるによこさまなるやうにてつるにかくなり侍ぬればかへりてはつらくなんかしこき御心さしを思給へられ侍これもわりなき心のやみになんといひもやらすむせかへり給ほとに夜もふけぬうへもしかなんわか御心なからあなち人にめおとろく許おほされしもなかゝるましきなりけりと今はつらかりける人のちきりになむ世にいさゝかも人の心をまけたる事はあらしと思ふをたゝこの人のゆへにてあまたさるましき人のうらみをおひしはてゝはかううちすてられて心おさめん方なきにいとゝ人わろうかたくなになりはへるもさきの世ゆかしうなんとうち返しつゝ御しほたれかちにのみおはしますとかたりてつきせすなくゝ夜いたうふけぬればこよひすくさす御返そうせんといそきまいる月はいりかたのそらきようすみわたれるに風いとすゝしくなりてくさむらのむしのこゑゝもよほしかほなるもいとたちはなれにくき草のもと也

すゝむしのこゑのかきりをつくしてもなかき夜あかすふるなみた哉えものりやらす

いとゝしく虫のねしけきあさちふに露をきそふる雲のうへ人かこともきこえつへくなんといはせ給ふおかしき御をくり物などあるへきおりにもあらねはたゝかの御かたみにとてかゝるようもやとのこしたまへりける御さうそくひとくたり御くしあけのうとめく物そへ給ふわかき人ゝかなしきことはさらにもいはず内わたりをあさゆふにならひていとさうゝしくうへの御ありさまなと思ひいてきこゆれはとくまいりたまはむ事をそゝのかしきこゆれとかくいまゝゝしき身のそひたてまつらんもいと人きゝうかるへし又みたてまつらてしは

しもあらんはいとうしろめたう思ひきこえ給てすかすかともえまいらせたてまつり給はぬなりけり命婦はまたおほとこのもらせたまはさりけるとあはれにみたてまつるおまへのつほせんさいのいとおもしろきさかりなるを御覽するやうにてしのひやかに心にくきかきりの女房四五人さふらはせ給て御ものかたりせさせ給なりけりこのころあけくれ御覽する長恨歌の御ゑ亭子院のかゝせ給て伊勢つらゆきによませ給へるやまとことの葉をもろこしのうたをもたゝそのすちをそまくらことにせさせ給いとこまやかにありさまとはせたまふあはれなりつる事しのひやかにそうす御返御覽すれはいともかしこきはをき所も侍らすかゝるおほせことにつけてもかきくらすみたり心地になん

あらし風ふせきしかけのかれしよりこはきかうへそしつ心なきなとやうにみたりかはしきを心おさめさりけるほど、御覽しゆるすへしいとかうしもみえしとおほししつむれとさらにえしのひあえさせ給はず御覽しはしめし年月の事さへかきあつめよろつにおほしつゝけられて時のまもおほつかなかりしをかくても月日はへにけりあさましようおほしめさる故大納言のゆいこんあやまたす宮つかへのほいふかくものしたりしよろこひはかひあるさまにとこそ思わたりつれいふかひなしやとうちのたまはせていとあはれにおほしやるかくてもをのつからわか宮などおひいて給はゝさるへきついてもありなんいのちなかくとこそ思ねむせめなどのたまはずかのをくり物御覽せさすなき人のすみかたつねいたりけむしるしのかんさしならましかはとおもほすもいとかひなし

たつねゆくまほろしも哉つてにてもたまのありかをそことしるへくゑにかける楊貴妃のかたちはいみしきゑしといへともふてかきりありければいとほひすくなし大液芙蓉未央柳もけにかよひたりしかたちをからめいたるよそひはうるわしうこそありけめなつかしうらうたけなりしをおほしいつるに花どりのいろにもねにもよそふへき方そなきあさゆふのことくさにはねをならへ枝をかはさむとちきらせ給しにかなはさりけるいのちの程つきせすうらめしき風のをとむしのねにつけてものゝみかなしうおほさるゝに弘徽殿にはひさしくうへの御つほねにもまうのほり給はす月のおもしろきに夜ふくるまであそひをそし給なるいとすさまじうものしときこしめすこのころの御けしきをみたてまつるうへ人女房などはかたはらいたしときゝけりいとをしたちかとくしき所ものしたまふ御方にて事にもあらすおほしけちてもてなし給なるへし月もいりぬ雲のうへもなみたにくるゝ秋の月いかてすむらんあさちふのやとおほしめしやりつゝともし火をかゝけつくしておきおはします右近のつかさのとのる申

のこゑきこゆるほうしになりぬるなるへし人めをおほしてよるのおと、にいらせ給てもまとろませ給ことかたしあしたにおきさせ給とてもあくるもしらてとおほしいつるにもなをあさまつりことはをこたらせ給ひぬへかめりものなともきこしめさすあさかれひのけしき許ふれさせ給て大正しのおものなどはいとはるかにおほしめしたれはいせんにさふらふかきりは心おとこ女いとわりなきわさかたてまつりなけくすへてちかうさふらふかきりは心おとこ女いとわりなきわさかなといひあはせつ、なけくさるへきちきりこそおはしましけめそこの人のそのしりうらみをもは、からせ給はすこの御事にふれたる事をはたうりをもうしなはせ給ひいまはたかく世中のことをもおもほしすてたるやうになりゆくはいとたいくしきわさなりと人のみかとのためしまてひきいてさ、めきなけきけり月日へてわか宮まいり給ひぬいと、このよの物ならずきよらにおよすけ給へれはいとゆ、しうおほしたりあくる年の春坊さたまり給にもいとひきこさまほしうおほせと御うしろみすへき人もなく又世のうけひくましき事なりければなかくあやうくおほしは、かりていろにもいたさせ給はすなりぬるをさはかりおほしたれとかきりこそありけれと世人もきこえ女御も御心おちぬたまひぬかの御をは北の方なくさむ方なくおほししつみておはすらん所にたにたつねゆかんとねかひ給ひしるしにやつるにうせ給ひぬれは又これをかなしひおほすことかきりなしみこむつになり給年なればこのたひはおほしりてこひなき給年ころなれむつひきこえ給へるをみたてまつりをくかなしひをなむ返々のたまひけるいまは内にのみさふらひ給な、つになり給へはふみはしめなどせさせ給て世にしらすさとうかしこくおはすればあまりおそろしきまで御覽すいまはたれもくゝえにくみ給はしは、きみなくてたにらうたうし給へとて弘徽殿などにもわたらせ給御ともにはやかてみすのうちにいれたてまつり給いみしき物のふあたかたきなりともみてはうちゑまれぬへきさまのし給へれはえさしはなち給はす女みこたちふた所この御はらにましませとなすらひ給へきたにそなかりける御方くもかくれ給はすいまよりなまめかしうはつかしけにおはすれはいとおかしううちとけぬあそひくさにたれもく思きこえ給へりわさとの御かくもんはさる物にてことふえのねにもくもあをひ、かしすへていひつ、けはことくしう、たてそなりぬへき人の御さまなりけるそのころこまうとのまられるなにかしこきさうにむありけるをきこしめして宮のうちにめさんことは宇多のみかとの御いましめあれはいみしうしのひてこのみこをこうろくわんにつかはしたり御うしろみたちてつかうまつる右大弁の子のやうにおもはせてゐてたてまつ

るに相人おとろきてあまた、ひかたふきあやしふくにおやとなりて帝王のか
みなきくらゐにのほるへきさうおはします人のそなたにてみればみたれうれふ
る事やあらむおほやけのかためとなりて天下をたすくる方にてみれば又そのさ
うたかふへしといふ弁もいとさえかしこきはかせにていひかはしたる事ともな
んいとけうありけるふみなとつくりかはしてけふあすかへりさりなんとするに
かくありかたき人にたいめむしたるよろこひかへりてはかなしかるへき心はへ
をおもしろくつくりたるにみこもいとあはれなる句をつくりたまへるをかきり
なうめてたてまつりていみしきをくり物ともをさ、けたてまつるおほやけより
もおほくの物たまはずをのつから事ひろこりてもらさせ給はねと春宮のおほち
おと、などいかなる事にかとおほしうたかひてなむありけるみかとかしこき御
心にやまとさうをおほせておほしよりにけるすちなれはいま、てこの君をみこ
にもなさせたまはさりけるを相人はまことにかしこかりけりとおほして無品親
王の外尺のよせなきにてはた、よはさしわか御世もいとさためなきをた、人に
ておほやけの御うしろみをするなんゆくさきもたのもしけなめること、おほし
さためていよくみちくのさえをならはさせ給きはことにかしくてた、人
にはいとあたらしけれとみことなり給なは世のうたかひおひ給ぬへくものし給
へはすぐえうのかしこきみちの人にかんかへさせ給にもおなしさまに申せは源
氏になしたてまつるへくおほしをきてたり年月にそへてみやす所の御事をおほ
しわする、おりなしなくさむやとさるへき人くまいらせ給へとなすならひに
おほさる、たにいとかたき世かなとうとましようのみよろつにおほしなりぬるに
先帝の四の宮の御かたちすぐれ給へるきこえたかくおはしますは、后世になく
かしつききこえたまふをうへにさふらふ内侍のすけは先帝の御時の人にてかの
宮にもしたしうまいりなれたりければいわけなくおはしまし、時よりみたてま
つりいまもほのみたてまつりてうせ給にしみやす所の御かたちに、たまへる人
を三代のみやつかへにつたはりぬるにえみたてまつりつけぬをきさいの宮のひ
め宮こそいとうおほえておひいてさせ給へりけれありかたき御かたち人にな
んとそうしけるにまことにやと御心とまりてねむころにきこえさせ給けりは、
きさきあなおそろしや春宮の女御のいとさかなくてきりつほのかういのあらは
にはかなくもてなされにしためしもゆ、しうとおほしつ、みてすかくしうも
おほした、さりけるほどに后もうせ給ぬ心ほそきさまにておはしますにた、わ
か女みこたちのおなしつらに思きこえんといとねんころにきこえさせ給さふら
ふ人く御うしろみたち御せうとの兵部卿のみこなとかく心ほそくておはしま

さんよりはうちすみせさせ給て御心もなくさむへくなどおほしなりてまいらせ
たてまつり給へりふちつほときこゆけに御かたちありさまあやしきまてそおほ
え給へるこれは人の御きはまさりて思なしめてたく人もえおとしめきこえ給は
ねはうけはりてあかぬことなしかれば人のゆるしきこえさりしに御心さしあや
にくなりしそかしおほしまぎるとはなけれどをのつから御心うつろひてこよな
うおほしなくさむやうなるもあはれなるわさなりけり源氏のきみは御あたりさ
り給はぬをましてしけくわたらせ給御方はえはちあへたまはずいつれの御方も
我人におとらんとおほいたるやはあるとりくいにいとめてたけれとうちおとな
ひ給へるにいとわかうつくしけにてせちにかくれ給へとをのつからもりみた
てまつるは、みやす所もかけたにおほえたまはぬをいのように給へりと内侍の
すけのきこえけるをわかき御心ちにいとあはれと思きこえ給てつねにまいらま
ほしくなつさひみたてまつらはやとおほえ給うへもかきりなき御おもひとちに
てなうとみ給そあやしくよそへきこえつへき心地なんするなめしとおほさてら
うたくし給へつらつきまみなどはいとようになりしゆへかよひてみえ給もにけ
なからすなんなときこえつけ給へれはおさな心地にもはかなき花もみちにつけ
ても心さしをみえたてまつるこよなう心よせきこえ給へれは弘徽殿女御又この
宮とも御なかそはくしきゆへうちそへて本よりのにくさもたちいて、ものし
とおほしたり世にたくひなしとみたてまつり給ひなたかうおはする宮の御かた
ちにも猶にほはしさはたとへん方なくうつくしけなるを世の人ひかるきみとき
こゆちつほならひ給て御おほえもとりくなればか、やく日の宮ときこゆこ
のきみの御わらはすかたいとかへまうくおほせと十二にて御元服したまふるた
ちおほしいとなみてかきりある事に事をそへさせ給ひと、せの春宮の御元服南
殿にてありしきよそほしかりし御ひ、きにおとさせ給はすところくのき
やうなとくらつかさこくさうぬんなどおほやけことにつかうまつれるおろそか
なることもそと、りわきおほせ事ありてきよらをつくしてつかうまつれりおほ
します殿のひむかしのひさしひんかしむきにいしたて、火んさの御座ひきいれ
の大臣の御さ御前にありさるの時にて源氏まいり給みつらゆひたまへるつらつ
きかほのにほひさまかへたまはん事おしけ也大蔵卿くらひとつかうまつるいと
きよらなる御くしをそくほと心くるしけなるをうへはみやす所のみましかはと
おほしいつるにたへかたきを心つよくねんしかへさせ給かうふりし給て御やす
み所にまかてたまひて御そたてまつりかへておりてはいしたてまつり給さまに
みな人なみたおとし給みかとはたましてえしのひあへ給はすおほしまきる、お

りもありつるむかしのこと、り返しかなしくおほさるいとかうきひわなるほどはあけをとりやとうたかはしくおほされつるをあさましうつくしけさそひ給へりひきいれの大臣のみこはらにた、ひとりかしつき給おほん女春宮よりも御けしきあるをおほしわつらふ事ありけるこのきみにたてまつらむの御心なりけり内にも御けしきたまはらせ給へりければさらはこのおりのうしろみなかめるをそひふしにもともよほさせ給ければさおほしたりさふらひにまかて給て人くおほみきなどまいるほどみこたちの御さのすゑに源氏つき給へりおと、けしきはみきこえ給事あれと物のつ、ましきほどにてともかくもあへしらひきこえ給はすおまへより内侍せむしうけたまはりつたへておと、まいりたまふへきめしあれはまいり給御ろくの物うへの命婦とりてたまふしろきおほうちきに御そひとくたりれいの事也御さかつきのついでに

いとさなきはつもとゆひになかき世をちきる心はむすひこめつや御心はえありておとろかせ給

むすひつる心もふかきもとゆひにこきむらさきの色しあせずはとそうしてなかはしよりおりてふたうし給ひたりのつかさの御むまくら人所のたかすへてたまはり給みはしのもとにみこたちかむたちめつらねてろくもしなく、にたまはり給そのひのおまへのおりひつものこ物など右大弁なんうけたまはりてつかうまつらせけるとむしきろくのからひつともなと所せきまで春宮の御元服のおりにもかすまされりなか、かきりもなくいかめしうなんその夜おと、の御さとに源氏のきみまかてさせたまふさほう世にめつらしきまてもてかしつききこえ給へりいとさひはにておはしたるをゆ、しううつくしと思きこえ給へり女きみはすこしすくし給へるほどにいとわかうおはすれはにけなくはつかしとおほいたりこのおと、の御おほえいとやむことなきには、宮内のひとつきさいはらになんおはしければいつかたにつけてもいとはなやかなるにこの君さへかくおはしそひぬれは春宮の御おほちにてつゐに世中をしり給へき右のおと、の御いきをひは物にもあらずをされ給へり御こともあまたはらく、にものし給宮の御はらは蔵人少将にていとわかうおかしきを右のおと、の御なかはいとよからねとえみすくし給はてかしつき給四の君にあはせ給へりおとらすもてかしつきたるはあらまほしき御あはひともになん源氏の君はうへのつねにめしまつはせは心やすくさとすみもえし給はす心のうちにはた、ふちつほの御ありさまをたくひなしと思きこえてさやうならむ人をこそみめに人なくもおはしけるかなおほいと、きみいとおかしけにかしつかれたる人とはみゆれと心にもつかす

おほえ給ておさなきほどのこゝろひとつにかゝりていとくるしきまでそおはしけるおとなになり給てのちはありしやうにみすの内にもいれたまはす御あそひのおりくことふえのねにきこえかよひほのかなる御こゑをなくさめに内すみのみこのましうおほえ給五六日さふらひ給ておほいとのに二三日なとたえくゝにまかて給へとたゝいまはおさなき御ほとにつみなくおほしなしていとなみかしつききこえ給御方くゝの人くゝ世中にをしなへたらぬをえりとゝのへすくりてさふらはせ給御心につくへき御あそひをしおほなくおほしいたつく内にはもとのしけいさを御さうしにてはゝみやす所の御方の人くゝまかてちらすさふらはせ給さとの殿はすりしきたくみつかさに宣旨くたりてになうあらためつくらせたまふもとのこたち山のたゝすまひおもしろき所なりけるを池のこゝろひろくしなしてめてたくつくりのゝしるかゝる所におもふやうならむ人をすへてすまはやとのみなけかしうおほしわたるひかるきみといふ名はこまうとのめてきこえてつけたてまつりけるとそいひつたへたるとなむ